

現代日本の漢字規格

京都大学教授 阿 辻 哲 次

ひとくちに「漢字」といっても非常に幅の広い分野であり、私たち日本人や中国人、あるいはかつての朝鮮半島や、もっと昔はベトナムなどの地域でも、漢字を使ってそれぞれの国の言語を書いておりました。それが、第二次世界大戦が終了してから状況が大きく変わり、中国は社会主義国家となり、朝鮮半島は南北ふたつの国に分かれました。もともとベトナムは十八世紀半ばくらいには漢字文化圏からは離れていましたが、東アジアのかつて漢字を輻帯とした文化共同体があつた地域が、このように各国の変革によって、異なつた文化的状況にあるのが現実です。

要するに中国は中国で、韓国は韓国で、日本は日本で、それぞれ漢字に対する改革と取り組みがおこなわれているのですが、ヨーロッパの人々から見ると、東アジア全体に展開する文字文化はやはり非常にユニークに見えるようです。

私が勤める大学院にかつてイタリアからの女子学生が留学に来ていました。その女性は身長が一メートル七十七

ハセチチはあるでしょうか、まるでファッション雑誌から抜け出てきたような金髪の美人で、今の学生さんにはなかなか通じないと思いますが、昔「ヒデとロザンナ」という歌手がいて、あのロザンナさんによく似た人でした。

そのロザンナさんによく似た金髪美人が流暢な京都弁をしゃべるといって、実におもしろい女性でしたが、「ヨーロッパ人の目から見た東洋の文字文化」というテーマで勉強していたころ、彼女がまことにすばらしい指摘をしてくださいました。それは、たとえば「動物園にライオンがいる」という日本語を、「どうぶつえん」が漢字で書ける年代から上ならば、ほとんどの日本人はまちがいに「動物園」三文字を漢字で、「ライオン」四文字をカタカナで書き、それ以外の「が」「いる」はひらがなで書きます。そのことは百人でも一万人でも同じであって、日本の人口を一億二千万人とすれば「動物園」を漢字で書ける人はきつと一億人はいますが、一億もの人がほぼ全員同じような文字の使い分けをしているわけです。

「なぜ日本人は、漢字とひらがなとカタカナという全く違う種類の文字を全国民がほとんど同じように使い分けることができるのか」とその留学生から聞かれて、私は答えに窮してしまいました。そのように学校で習うからかなあ……とその場しのぎの返答をしても、「学校で習うことを全国民がそのまま覚えてくれたら、先生にとってそんなありがたい話はありませんよね」と彼女は納得しません。たとえば台形の面積を出す公式を小学校の算数の授業で習いますが、しかし一億人の日本人全員がいますぐに台形の面積を出せるわけではないでしょう。しかし漢字については、そのような状況が実際に存在するのですね。

そこであらためて考えると、「動物園」という三文字は漢字で書く言葉であると、我々は小学校の授業を通じて頭のなかのどこかで刷りこまれているのです。また「ライオン」は外来語だからカタカナで書くということも、どこかで脳裏に刷りこまれていて、学校教育を通じて全国民が同じように知識を持つから、たぶんそのようにひらがなとカ

タカナと漢字を使い分けているのにちがひありません。

日本語は「漢字」と「ひらがな」と「カタカナ」という異なった三種類の文字を、少し難しくいえば、「漢字」という「表意文字」と、「ひらがな」・「カタカナ」(それに「ローマ字」)の「表音文字」を混せて書く言語です。このような表記方法は世界的に見ても例がなく、だいたい世界中の言語は一種類の文字で書くことに決まっています。英語やフランス語・ドイツ語・イタリア語はすべて a・b・c などのローマ字、いわゆるラテン文字で書きますし、ロシア語などスラブ語系統は「キリル文字」で書かれます。イスラム圏やアラビア諸国ではアラビア文字という、右から左へ書いていく文字を使っていますし、中国は漢字だけです。というように考えると、世界中の言語は単一の文字で書くというのが当たり前になっているのです。

いっぽう日本語はそうではありません。私たちは「漢字」と「ひらがな」と「カタカナ」とそして「ローマ字」と、さらにはプラスアルファとかベータカロチンということでは *“a”* や *“β”* などのギリシャ文字まで使っています。ギリシャ文字はいささか特殊であるとしても、それでも少なくとも「漢字」と「ひらがな」と「カタカナ」と「ローマ字」と四種類の異なった性格の文字を、全国民が同じように自由に使い分けて書いているのはまちがひありません。そしてそのことを、私たちはそんなたいしたことをしているとは思わず、いわば当たり前のことと認識しており、それができなかったら大人になる資格がないとまで考えています。

しかし世界的に見れば、これは非常に極めて特殊な状況であって、日本語のほかには韓国語があるだけです。韓国語は「ハングル」という韓国・朝鮮語を書くための表音文字と、一八〇〇種類で構成されている「教育用漢字」をまぜて使うことがあって、新聞などでは「漢字ハングル混じり文」が使われています。ただ韓国にいらっしやったことがある方ならご存じの通り、韓国の街中は基本的にハングルばかりで、お店の名前などはほぼすべてハングルだけで

書かれています。ハングルが読めなかったらバスや地下鉄にすら乗れないということになるのですが、それでも一部の新聞では「漢字ハングル混じり文」が使われています。したがって韓国も複数種の文字を使い分けて言語を表記しているわけですが、しかし韓国がハングル一種類であるのに対して、日本ではひらがなとカタカナの二種類を使い分けています。日本人は文字の使い分けに関して、実は世界で最も複雑な仕組みをいとも簡単にこなしている、ということなのです。

しかしその使い分けも、実はそれほど単純なことではありません。

先ほど例とした「動物園にライオンがいる」という文章ならば一〇〇パーセントとっていいぐらいに漢字とカタカナとひらがなが使い分けられますが、しかし同じく日本語で「となりのおくさんはべっぴんだからほんとうにうらやましい」という文章を考えてみましょう。いささか下品な例文ですが、皆さん方はその文章をどのようにお書きになりますか？

これは人によってまちまちで、まず「となりのおくさん」の「となり」を「隣」と書く方もいらっしゃるでしょうし、「となり」とひらがなで書く方もいらっしゃるでしょう。「おくさん」の「奥」は漢字で書く方が多いだろうと思いますが、「隣」についてはわかれそうです。

つぎの「ほんとうに」についても「本当」を使うか、あるいはひらがなで「ほんとに」と書くか、若い方だったら「ホント」をカタカナで書いて「に」をひらがなで書くという書き方もあるでしょう。「べっぴん」についてはどうでしょうか。年配の方なら「別嬪」と書かれるでしょうが、「べっぴんってどんな漢字だったかなあ」と考えこむ方も多いことでしょう。さらに「別嬪」を若い方ならカタカナで書かれる可能性も高いですね。最後の「うらやましい」についても、「羨」を使うか、ひらがなで書くか、これには大きなバラツキがあると思います。

「どうぶつえんにらいおんがいる」ではほぼ一〇〇パーセント同じような文字を使い分けるのに、「となりのおくさんはほんとうにべっぴんでうらやましい」では文字の使い分けにかなりバラツキがあります。

私たちはこのように漢字とひらがなとカタカナを日常的に使い分けて文章を書いているわけですが、個人で文章を書くときには、私なら私がどのような文字の使い方をしようがそれはまったく自由であって、おカミが口を出す話ではありません。それは国や組織が口を出すべきレベルのものではありません。

しかし人間は社会の中で一人一人が気ままに生きているわけではありません。私が日記を書いたり、手帳にメモをつけるときにどんな字を書こうがそれはまったく自由ですが、しかし友人に手紙を書いたり、こうして黒板に必要なことを板書したりするときには、文字は他人に対して何かを伝達するツール・道具として使われているわけで、そこには情報の伝達にかかわる基本的なルールが関係してきます。

社会生活を営むためには、各人が勝手な文字遣いをしていると情報伝達の効率が極端に悪くなります。そこで私たちの日常生活をめぐっては、個人の文字生活とは違うレベルで、国が漢字に関する規格を作っており、これには三種の類のがあります。

その三種類とは、「常用漢字」と「人名用漢字」と「情報交換用漢字符号系」というものです。これからこの三種について話してまいります。最初の「常用漢字」は、私たちが日本語を使って文章を読み書きするときに漢字を使う目安として定められたもので、かつては文部省（現在の文部科学省）が、いまは文化庁がこれを管轄しています。

次の「人名用漢字」は皆さんよくご存じだと思います。お子さまやお孫さんが生まれた時には、日本国籍を持つ場合、出生後二週間以内に役所に出生届を出さねばなりません。その出生届に記載する名前に使える文字が法務省によって決められています。

この名前に使える漢字が今から二年前、二〇〇四年の九月に追加されました。実はあの「人名用漢字」を増やすための委員会に私も加わっていましたので、今日はその内幕でしゃべってもいい裏話をすこしお話ししようかと思っています。

さらに三つ目の規格はいわゆる「JIS漢字」であり、正式名称を「情報交換用漢文字符号系」と申します。これは「工業製品で使うための漢字の規格」であって、日本には「日本工業規格」(JIS = Japanese Industrial Standards)というものがごいます。

JISはありがたいもので、たとえばトイレの電球が切れたときに、私たちは「太郎ちゃん、悪いけど電器屋さんに行つて六十ワットの電球を買つてきて」と子どもにお使いを頼みますが、そのときに日立とかナショナルなどのメーカーを指定せず、単に「六十ワット一個買つてきて」と申します。あるいは何かの機械で乾電池が切れるとコンビニやキオスクで「単三の電池ください」と注文しますが、別に「NECの電池」とか、「東芝の電池」とかメーカーを指定しませんが、それは「日本工業規格」によつて六十ワットの電球はこうつくる、単三の乾電池はこうつくるという規格が定められているからです。だからこのメーカーの電球であっても六十ワットを買つてくれれば電気が点くわけです。

文字についても同じことで、たとえばNEC製の携帯電話からナショナル製の携帯電話にメールを送つても、富士通製の携帯電話にメールを送つても同じように文章が表示されなければ困ります。携帯電話にはコンピュータが入っていますが、コンピュータの中には信号しか流れていません。ごくごくおぼつぱに言えば、「1234」という信号が届いたら「山」という字を出しなさい、「2468」という信号が流れたら「川」という字を出しなさいとコンピュータに命令が入っているわけです。今ナショナルの携帯電話では「1234」という信号で「山」という字が出

ることになっているのに、その信号が別のメーカーの携帯電話では「海」という字が出るようになっていたら、とてもない話になりますね。「今年の夏に山へ行こうよ」とメールで送っても、受けた側で「今年の夏に海へ行こうよ」と表示されたら大問題です。

つまりどのメーカーの機械でも、ある信号が流れたら同じ文字が表示されなければならないわけで、だから六十ワットの電球や単三の乾電池と全く同じレベルで文字が扱われているということです。「日本工業規格」では工業製品で漢字を扱うために背番号をつけているわけで、これを一般には「JIS漢字」とよんでいます。

さて私たちをとりまく環境では常用漢字と人名用漢字とJIS漢字の三つの規格があるのですが、最初に常用漢字についてお話しいたします。

一昔前に「当用漢字」という規格がありました。年配の方はよくご承知でしょうが、一九四六（昭和二十一年）年に「当用漢字」が制定されました。これは「当面の間使用するべき漢字」という意味の規格で、公文書における漢字制限として決められたものです。

私は大学の中国文学科を卒業しており、若い頃からずっと漢文を読んできましたので、私の感覚では「当用」という二文字を「^{まよ}当に用いるべし」としか読めません。それで私は「当用漢字」とは「当に用いるべき漢字」という名称で制定されたものだと思って疑わなかったのですが、ところがあるとき「いや、それは違う。あれは当面の間使うことにするという意味で『当用』と決めたのである」と聞いて、そんなバカなことがあるものか、銀行の当座預金じゃあるまいし、と本気でむきになって調べたら、やはり「当面の間用いるべき漢字」という意味でつけられた名称であることがわかって愕然といたしました。

私は昭和二十六年生まれですので、昭和二十一年という終戦直後の混乱期は存じませんが、価値観の一八〇度急転

回に伴って、ありとあらゆるもの変革が起こったと聞いております。変革の大きな流れはGHQの指導によるもので、アメリカ人から見たら、漢字を使う文化はやはり不可解で不気味なものだったのでしょう。欧米人の中には漢字を使うことに對して根本的に理解できない人々がいるようで、特にそれがGHQとして国のトップにいると、なかなか日本政府も好きなことを言えなかったのでしょう。GHQによれば、漢字を使っていると子どもの学習の負担が重い、ローマ文字は二十六文字、大文字小文字あわせても五十二文字さえ覚えれば英語は書けるのに、漢字を使って日本語を書くとき一〇〇〇や二〇〇〇はたちどころに必要なになるので、子どもの学習負担がきつくなる。だから漢字を使わずに、いつそのことローマ字だけで日本語を書こうとか、或いは極端な話では、また日本人がたくさんの漢字を使うと「子曰く」うんぬんかんぬんの儒教の文献を読むようになって、「君には忠、親には孝」という封建的な考え方が広がって再び「軍事大国化」とするという危険があるという考えも述べられました。いま冷静に考えると非常に愚かな短絡的思考としかいえませんが、それがGHQのトップから出てくれば、「それはちがいますよ」とはなかなか当時の文部省は言えなかったのでしょう。

占領軍では漢字を全面廃止しようとしたのですが、なんとか必死の抵抗を試みたようで、ときの政府は「そういう急激な変化はいたずらに混乱を招くばかりだから、とりあえず使う漢字を絞りこむ」という形で、「漢字で書くべき単語」と「漢字で書かない単語」を分けて、一八五〇種類の漢字を選びました。それが当用漢字の趣旨で、ここに入っていない漢字は、ひらがなで書くか、あるいは他の言葉に言い換えるということがおこなわれました。

「探偵」の「偵」という漢字は「当用漢字」に入りませんでしたので、公文書では「探偵」と書けません。そうすると「怪人二十面相と戦う明智小五郎の探偵小説」とは書けなくなります。もちろん個人がその漢字を使うのは勝手ですが、しかし公用文書や新聞雑誌などマスコミの刊行物では「当用漢字」に入っていない漢字が使えませんので、

「偵」をひらがなで書くわけです。そうすると「探てい小説」という、まことに間延びした表記になります。このような書き方を「交ぜ書き」といいますが「偵」が使えないといって「探てい小説」と書くのはちよつとみつともないので、その言い換え語としてつくられたのが「推理小説」でした。「推理小説」という言い方は「偵」が「当用漢字」に入らなかつた言い換え語としてつくられた言葉ですが、でも明智小五郎が活躍する話は「推理小説」ではなく、絶対に「探偵小説」でしょう。ちなみに「偵」はその後「常用漢字」に入りましたから、今は「偵」は使えるようになります。

それ以外にも、「白亜の大理石」というときの「白亜」はもともと「白堊」と書かれていましたし、気分が高まって「激昂する」の「昂」を、言い換え語では「高」に置き換えて、今では「激昂」と書かれるようになりました。

その他のさまざまな言い換え表現の中にはすでに社会に定着しているものもたくさんございます。官僚が賄賂をとることをかつては「瀆職」といいましたが、「瀆」が当用漢字に入らなかつたので「汚職」という言葉ができました。これなどは完全に定着した好例と思いますが、いずれにしても一八五〇という数に絞りこんで、その枠の中で漢字を使うということと、それから一昔前の難しい書き方、いわゆる「旧字体」を「新字体」に直しました。たとえば「學」「樂」「辭」「藝」「當」「傳」「體」などは「学」「楽」「辞」「芸」「当」「伝」「体」と書くことにし、それを正規の字体と認定しました。

一八五〇種類という字数の制限と、その中に含まれているそれぞれの漢字の形の簡略化、その二本立てで「当用漢字」、すなわち「当面の間これだけ漢字を使う」ということで当用漢字が昭和二十一年（一九四六）に定められました。しかし「当用」である限り、いつかは「正式版」が決められなければいけません。「当用」とは暫定バージョンであり、その正式バージョンがやがて決められなければならない。「戦後の混乱で、さまざまな改革は大変だから、と

りあえずこう決めておいて、詳しいことはまた後で決めましょう」というわけでした。ではその正式バージョンが決められたのはいつかといいますと、それはなんとそれから三十五年後の一九八一年、昭和五十六年のことでした。

その正式バージョンが「常用漢字」です。「常用漢字」は現在の日本社会における漢字使用の目安として、文部科学省、或いは文化庁が定めているものです。戦後すぐの「当用漢字」は漢字制限のための規格として定められたものでした。それは、公文書ではこれだけの漢字しか使ってはいけない、ここに入っていない漢字は使ってはいけないというものでしたが、「常用漢字」は日常生活における「目安」とされました。「常用漢字」は一般の社会生活において現代の国語を書きあらわすための漢字使用の目安として決められ、「当用漢字」の一八五〇字から九十五文字増えて、一九四五文字で構成されています。

当用漢字から常用漢字への変化は、使える漢字が九十五文字増えたということよりも、むしろ「制限」から「目安」に変わったということの方が重要でした。たとえば「このジェットコースターには一メートル五〇センチ以下の人は乗れません」というのは制限であって、一四九センチの人は絶対に乗れませんが、「このジェットコースターに乗れるのは一五〇センチを目安とします」とあれば、係員の裁量によって一四九センチの人にも乗れる可能性があります。「制限」と「目安」はよく似た概念ですが、実はかなり違います。

常用漢字に入っていない漢字のひとつに、このごろ新聞紙上でよく見かける「拉」があります。あの漢字は常用漢字に入っていない漢字ですから、当用漢字の時代だったら新聞もその字は使えないのですが、常用漢字は目安ですから、新聞社独自の判断で「この漢字を使う」と決めれば使えるのです。

現実に新聞やNHKは「拉」を使っています。「拉致事件」は「横田さん」のように上に人名がきますが、この「拉」をひらがなで書き、「致」を漢字で書くと、複数形の語尾に読まれてしまいます。「横田さんら致事件」と書か

れていれば、「横田さんたちが致す事件」ってなんだろう?ということになってしまっただけですね。そういう誤読を避けるためにも、報道機関は「拉」を使うこととしたわけです。実際に各新聞社は数十字の「表外漢字」(常用漢字に入っていない漢字)を使っています。

いっぽう「朕」や「璽」という戦前の皇室専用の漢字が、いまま常用漢字に入っています。これは当用漢字に入っていたのがそのまま引き継がれているのですが、当用漢字が制定された昭和二十一年は、今の日本国憲法がまだ施行される前の時代でした。したがって形式的にはまだ大日本帝国憲法の時代なのです。大日本帝国憲法が形だけでも存在する時代に決められた漢字の規格に「朕」と「璽」がなかったら憲法が書けなくなる。そこで当用漢字には憲法を表記するために「朕」と「璽」が入ったわけです。昭和五十六年に「常用漢字」にするときにはこの二文字を削ろうという議論もありましたが、しかし昭和二十三年の日本国憲法の発布に際して天皇が発布した詔勅の中に「朕」と「璽」が使われているそうです。すなわち日本国憲法になっても、その関連書類の中に「朕」と「璽」が出てくるのです。これをどうするかはかなり頭の痛い問題であり、「朕」はもともと天皇しか使えない言葉ですが、今上陛下は「朕」を使わず、「わたくし」とおっしゃいます。したがって「朕」は実は誰も使わない文字であり、「こんなものが常用か!」ということになるわけです。

他にも「常用漢字」に入っていないがほとんど使われていない漢字もあって、たとえば「膳」。いまの若い方は膳写版印刷、いわゆる「ガリ版」を知りませんが、「膳写版」の「膳」は常用漢字です。ガリ版がなくなっても「戸籍謄本」がありますから、それで「膳」はいまま常用漢字に入っているのです。法務省など内閣の省庁が「戸籍謄本」という名称を変えない限り、これは公文書を書くために絶対必要な言葉なので、常用漢字に入れざるを得ない。ほかにも「弾劾裁判」の「劾」という字、「弾劾裁判」というのは国会がおこなう裁判官に対する裁判で、「劾」は「弾劾

裁判」くらいにしか使われない漢字ですが、国会が絶対にあの字を必要とするので常用漢字に入っています。

常用漢字はそうのようにいくつかの矛盾を抱えている規格ですが、しかし私たち一般国民は日常生活の中で「この字は常用漢字だ、この字は表外字だ」と意識することなどありません。漢和辞典の編集者とか中学・高校の国語の先生が試験問題を作るときにはある漢字が常用漢字に入っているかないかがある程度は意識しますが、一般には関係ありませんよね。

ところがここ二十年ぐらい前から、キーボードや携帯電話を使って日本語を書くのがきわめて普通の行為になってきました。機械を使って「森鷗外」と書こうとすると、「かもめ」という字が普通のコンピュータでは「鷗」と表示されます。でも「森鷗外」という明治の文豪の名前は「鷗」でないと困るという思いをもつ人も世間にはたくさんいます。日本を代表する文豪の一人である作家を国語の先生が文学史の教材に書くときに、教科書は「鷗」で印刷されているのに、補助教材として先生がワープロでプリントをつくったら「鷗外」となってしまうわけです。注意深い生徒なら「あれっ、教科書は『鷗』なのに先生のプリントは『鷗』になっている、どちらが正しいのだろう」と、不思議に思うにちがいありません。

これを問題視したのが日本文藝家協会という組織でした。「コンピュータでは嘘字や略字が出る。『鷗』は俗字であって、正しくは『鷗外』と書くべきだ」との意見がその方面から強く主張されました。他にも「飛驒高山」の「驒」はコンピュータで書くとき「飛驒」となってしまう。コンピュータでも特別な仕掛けをすれば「鷗」も「驒」も書けるのですが、普通は書けません。それで国語や地理の先生なんかは困るわけで、この問題はいまま基本的には解決されておられません。

コンピュータで文字を書くことが普及してきたときに、コンピュータで表示される字の形とこれまで伝統的に使わ

れる字の形が違うということが、問題になりました。それで日本文藝家協会が、まずコンピュータを管轄している通産省(今の経済通産省)に見解をただしたところ、通産省は「いや、うちに文句を言われても困ります。通産省の仕事はカモメという鳥をあらわす漢字をコンピュータで表示するために背番号をつけただけで、カモメを表す漢字をどのような書くのが正しいのかを決めるのは文部省の仕事である」という趣旨の返答をよこしました。「カモメ」を表す漢字がまちがっているというのだったら、文部省に「カモメ」の正しい書き方を決めてもらってください、というわけですね。そこで文藝家協会が文部省に見解をただしたところ、「カモメ」という漢字は常用漢字には入っていないので、ひらがなで書くか、他の言葉で言い換えるべき言葉である、と木で鼻をくくったような返答が出てきました。

常用漢字はそういう建前であり、「海岸にカモメが一羽舞っている」という文章なら、それは「カモメ」と書けばいいのです。公用文では動植物名をカタカナで書くことになっていますので、「海岸にカモメが舞っている」ならカタカナで書けばよろしいのです。でも「森鷗外」の「鷗」をカタカナで書けるはずがありません。

そこで問題になったのが、常用漢字に入っていない漢字はいったい誰が管轄しているのかということでした。これは実はどこも管轄していなかったのです。文部省は常用漢字を管轄しますが、常用漢字に入っていない「表外字」については一切何の規定もなかったのです。そもそも「常用漢字表」の前文に、「この表に入っていない漢字については追って検討する」と書いてあるのです。「追って検討する」というのはお役所の得意文句ですが、要するにいつ検討するかわからないということであって、一向に検討されなかったのを世の中にコンピュータで文字を書くというところが広まってから後、字体の問題が人々の関心を集めたわけです。

常用漢字に入っていない漢字をどうするかというのが、次の『表外漢字字体表』というもので、これはカモメやヒダなど表外字を含んだ語彙を印刷する場合にどのような字体を使うべきかということについて、文部大臣の諮問機関

である国語審議会が定めたものです。

この表によって、「鷗」の他にも「攪」や「醬」などが「印刷標準字体」という名称で認知されました。いまでは明治の文豪を「森鷗外」と印刷するべきだということが決まっています。しかしコンピュータが社会に普及してすでに二〇年以上の時間が経っていて、それで書かれた文章がすでにいたるところにストックされていますので、いまだに「攪」や「醬」などという字体を認めないわけにもいかず、最終的には「簡易慣用字体」という名称でこれらの簡略体のものもいくつか認めています。

時間の関係で先を急ぎます。二番目は「人名用漢字」でした。日本人の名前は「戸籍法」という法律で規定されていて、「戸籍法」第五十条に、「子の名には、常用平易な文字を用いなければならない」と決められています。実はこれだけが名前に関する法律なのですが、「常用平易」とはよく使われて簡単である、ということです。さらのその条文の第二項に、「常用平易な文字の範囲は、法務省令でこれを定める」とあります。「法務省令」は法務大臣が出す命令です。つまり人名に使える漢字について、「これだけの漢字はよく使われて簡単ですから人名に使うことを認めます」と法務省が決めているわけです。

もともと当用漢字が制定されてからしばらくのあいだは、名前の文字は常用平易である当用漢字に入っている文字から選ぶと決められていました。ところが当用漢字には「彦」や「昌」、あるいは「弘」など日本人の伝統的に名前に使われていた漢字が入っていませんでした。それは当用漢字（その後を受けた常用漢字も）が固有名詞を対象とはしないという性格のものだったからです。固有名詞を対象としない規格でありながら、しかし人名は固有名詞を対象としていない当用漢字をそのままスライドさせ、そこに入っている漢字を常用平易としたわけですから、大きな矛盾がありました。

しかしそれでは困るという意見が国民のあいだから強く主張され、やがて一九五一年五月に内閣は「当用漢字」以外に、別に九十二文字を「人名用漢字」として定めました。当用漢字には入っていないけれども、これだけの漢字は名前に使えるとして九十二文字を指定したわけです。その中に先ほど申しました「弘」とか「昌」「彦」などの文字が入っています。

それを最初として、名前にこんな漢字を使いたいという希望がたくさん出され、法務省はなんとか人名用漢字を追加してきました。生まれた子供に名前をつけて、それを役所に届けたときに、その漢字が人名用漢字や当用漢字に入っていないと、役所は戸籍を受け付けてくれません。

余談ですが、戸籍担当の方から聞いた話では、「この漢字はダメです」と言われたときに、申請者の反応は二通りあるのだそうです。ひとつは窓口で激しく食ってかかる方、もうひとつはがっかり落ちこむ人だそうです。役所の人の話では食ってかかる人はまだ対応が楽なのだそうです。「それは国が決めていることですからあきらめていただきます」と係長などが告げると、最後にはだいたいしぶしぶあきらめるそうです。ところがもう一方の落ちこむタイプの人は、「えっ、だめなのですかあ……」とくずれおちそうになり、いったいどう慰めていいのかわからないものだと聞きました。

名前に使えない漢字が戸籍に申請されてきたときに、法務省はどんな漢字が希望として出てきたかをすべてチェックしてきたそうです。いついつにどこそこでこんな漢字を使いたいという希望があったということを法務省はきちんと記録に残していました。その記録に残っている要望が多い漢字の多くはこれまですでに人名用漢字に追加されているのですが、中にはびつくりする話もあって、私が驚いたのは、月ヘンに星という漢字でした。つまり「腥」という漢字ですが、これで「アキラ」と読ませたいというのです。

ところで戸籍では名前に使える漢字であれば、どのようによんでもかまわないことになっています。極端なことをいえば「春」と書いて「あき」と読んでもいいのです。実際、皆さまのまわりにも「えっ？」と思うような読み方の名前がいらっしやいますでしょう？

なぜそんなことができるのかというと、それは戸籍には「読み」を書く欄がないからなのです。戸籍には住所や両親の名前などは記載されますが、本人の名前をどう読むかという欄がないのです。だからあれば自由に読んでいい、というふうになっているのだそうです。

そこで先ほどの「腥」ですが、これでなぜ「アキラ」というと、お日様とお月様が並んだら「明」るいじゃないか。《日》と《月》で《明》だったら《月》と《星》が並んでも「あかるい」じゃないか、ということらしいのです。ところが、ご承知の方も多いと思いますが、「腥」とは「なまぐさい」という意味の漢字です。だからもしもその漢字で名前を付けられた「腥ちゃん」がやがて大きくなり、漢和辞典を引けるようになったら、「俺の名前はなまぐさい」という意味だったのか」とびっくりすることになるでしょう。

名前に使いたい漢字に対するニーズというのは、このほかにもものすごいものがたくさんあって、これを話しているととても時間が足りません。

さて一昨年に人名用漢字が大量に追加されるきっかけとなったのは「曾」という漢字でした。この「曾」と「良」を組みあわせた「曾良ちゃん」という名前が札幌市で申請されたのですが、「曾」が当時では人名用漢字に入っていなかったもので、当局は当然のようにその名前の受理を拒否しました。ところがその親はその処置に納得せず、不服申立を行って裁判となりました。

この裁判が地裁・高裁と進みましたが、いずれも行政側の敗訴となり、とうとう最高裁にまで争われました。そし

て二〇〇三年の十二月に最高裁の判決が出ましたが、最高裁の判決は「曾」は常用にして平易であるから名前に使える文字に入っていない状態は違法である。したがって「曾良」という名前の記載された出生届は、受理されるべきである、というものでした。

最高裁の判決は何よりも強く、絶対ひっくり返せませんから、最高裁の判決を受けて、法務省はすみやかに「曾」を人名用漢字に認定しました。

その段階で裁判になっていたのは「曾」だけではなく、それ以外に「こういう名前を使いたい」という裁判がいくつあつて、いずれも法務省サイドの敗訴がほぼ確実でした。それでこの際大幅に「人名用漢字」を増やそうということになって、二〇〇四年の春からそのための審議会が成立しました。

その年の二月末のことでした。たまたま自宅で調べものしていると電話がかかってきたので受けると、先方が「こちら法務省民事局の〇〇という検事ですが」と名乗りました。法務省の検事からいきなり電話がかかってきたら、誰だつてびっくりしますよ。「えつ、何がばれたのだろうか……」というのは冗談だとしても、本当に緊張するものです。

おずおずと用件を聞くと、このたび人名用漢字を見直すことになったので、ついでに漢字を研究していらつしやる貴殿にもその委員会に入っていただきたいとことで、ああ、そんなことなのかあ……とほっと胸をなげおろしたものでした。こうして人名用漢字の追加案を審議する委員会に入らせていただきました。

さてここで、実際におこなわれた裁判の経緯を見ながら、新しい漢字がどのようにして人名用漢字に追加されるのか、その経緯を簡単にご紹介しようと思います。「駕」という字を名前に使いたいという裁判を例とします。

もともと「駕」は名前に使えない漢字だったのですが、これに対して大阪家庭裁判所が最高裁判決を受けて、これ

を認めました。その理由がけっこうふっていきまして、まず「駕」は万葉仮名の「か」であって、日本語に古くから使われているということ。それから「駕」は常用平易な文字である《馬》と《加》から構成されているなど、今さら裁判官に教えてもらわなくともいいというような理由が並んでいます。

最高裁が「曾」を認めてからは、係争中の漢字はほとんどが親側の勝訴で、法務省は連戦連敗でした。だからこれ以上裁判に負けるのはかなわない、とばかりに大量に人名用漢字を増やそうということになったのです。

しかしそこには「暴挙」と思えることもありました。

人名に使えるのは「常用平易」な漢字と決められています。「常用平易」な漢字とは、「常用」という集合と「平易」という集合の重なっている部分にあつて、それが他でもなく「常用にして、平易な文字」となるわけです。そしてそのほかに民間から多数要望が出ている漢字も人名用漢字に追加することが検討されました。

民間からの要望が一番多かったのは「苺」でした。「苺ちゃん」という名前をつけたという希望はものすごく多く、全国四十七都道府県の中の四十四ヶ所の法務省に希望が出ていたのですが、特に多かったのは栃木県と福岡県など苺の産地でした。イチゴの生産農家は生まれた女の子に「苺ちゃん」という名前をつけたいのに、あの漢字が使えませんでした。それが一昨年に使えるようになってから、いまでは「苺ちゃん」という女の子がどんどん増えていくのだそうです。でもその子が八十歳になっても「苺ちゃん」ですから、ちよっと……とは思いますが、まあそんなことはおいておき、民間からの要望もこうして反映されました。

さて、「常用」とは何ぞや、「平易」とは何ぞや。これについて委員会は客観性のある漢字データを使い、そのデータをコンピュータで処理して、「この線より上を常用とする。この線より上を平易とする」というふうにデータ処理から「常用」の集合と「平易」の集合を作り、その重なっている部分を「常用平易」としました。

ところが「常用」という範囲で考えると、「糞」「屍」「呪」「癌」「姦」「淫」「痔」「妾」というような漢字もその枠に入ってきます。このような漢字は一般の書物ではまさに「常用」なのです。常用を判断するためのデータは凸版印刷という会社が過去数年間に何という漢字を何回印刷したかというもので、それは膨大なデータですが、医学書では「癌」や「痔」が、一般の小説では「淫」や「呪」なども頻繁に印刷されますから、それらはまさに「常用」の漢字であるわけです。

さらにここに掲げた漢字は、全部JIS漢字で「第一水準」に入っているので「平易」な漢字と考えられます。ほかにも「蔑」や「膿」「尻」「嘘」などは印刷物ではしつちゅう使われていますね。さらにいずれもそれほど難しくない漢字ですから、「常用」に入り、「平易」に入るわけです。だからこれらの漢字は「常用にして平易な漢字だから、人名用漢字に入る資格がある」と法務省はいうのです。

おいおい、ちょっと待ってください、と私を含めて文学部卒業の四人の委員がクレームをつけました。いくら常用であるとはいっても、人の名前に使える漢字ではないから、そんなものを認めるべきではないというのが私たちの意見でした。

私たちは「糞」や「姦」などが人名用漢字に認定されることをなんとか阻止しようと努力し、会議の席で積極的に発言しました。それらの漢字はデータ処理の結果からみれば、常用にして平易であることは間違いないのですが、しかしいったいどの誰が、子どもの名前に「嘘子ちゃん」とか「淫太郎」という名前をつけるでしょうか。それは人間としての良識の問題であって、こんな不快なイメージをとまなう漢字を「人名用漢字」として追加するのは、審議会全体の見識を問われる大問題でもあります。人名に使われるという点をもっと重視するべきだ、と私たちはかなり強固に主張したのです。

ところが文学部の人間と法学部の人間というのは、こうも発想がちがうのかと驚きました。法律家の考えからすると、しかるべき処理の結果浮かび上がってきた漢字の中で、「嘘」とか「痔」とか「糞」などを不適当だと外すのは、それは阿辻委員や〇〇委員という特定の個人の主観によるものであって、個人の主観によって結論をいじることは法務省としてはできない、データで拾われた限りそれは必ず常用にして且つ平易な文字であって、法律は「常用平易」と規定しているのだから、「糞」であろうが、「癌」であろうが、「常用平易」の漢字として「人名用漢字」の資格を持つというのです。

さらには役所の窓口で戸籍を扱う方々が一番辛いのは、「この字は使えません」とつき返すことだから、できるだけたくさん漢字を認めてほしいという現場の希望があるということです。こんな詭弁だと思いますが、たとえば癌を絶滅するために一生懸命医学の研究に邁進している若き医者に男の子が生まれたとして、父親である医者は自分の研究テーマを子どもの名前に託して、「癌克服」という名前をつけるとしたら、それは受理されるべきだと思います。

そんな馬鹿な話があるかとお思いになりますでしょうか？ しかしその話を実際にある委員会が審議会の席で堂々と言っていたのです。「癌克服」という名前が申請されたとき、それは役所としては受け付けてあげたいというのです。

行政や法律の現場にいる方々と私たちはぜんぜん噛み合わず、とにかく押し切られるというかたちで原案が承認され、それが法務省のホームページで「パブリックコメント」にかけられました。パブリックコメントとは一般からの意見募集で、こういう人名用漢字を増やそうと思いますがいかがでしょうかという提案をして、一ヶ月ほど民間から意見を募集するのですが、民間からの意見は、来るわ、来るわ、来るわ、ものすごい数の批判が殺到しました。「糞」とか「屍」とか「呪」とか「淫」とか、こんな字を日本人の名前に使えるようにするつもりか！ 法務省はな

にを考えているのだ！と、それはもうこてんぱんにやられてまして、私なんかは「ほら、言わんこっちゃない。ざまあみろ」とよろこんだものでした。

非難集中のバブリックコメントが終わってから、九月の初めに委員会があつて「ほら、やっぱりでしよう」と言つたら、「敵」である法務省の関係者はニコニコとしているのです。「良かったですねえ。これでやつとこの漢字は削れます」とよろこんでいました。実は彼らも「糞」や「姦」、「嘘」「痔」などを削るために、抛り所を必要としていたのです。「委員会の中でこの漢字は不適当ですという意見が出たから削ります」では、だめなのですね。それは法律家のすることではないのです。それでバブリックコメントというかたちで大量の批判が集まったのを論拠にして、「はい、これだめですね。これだめですね」と、もうニコニコしながら削っていました。その結果が、二〇〇四年の九月二十七日に出ました四八八文字の追加案です。この結果、それまでの常用漢字や人名用漢字とあわせて、いまでは三〇〇〇字近い漢字が名前に使えるようになりました。

まだもう一つ、JISについての話が残っていますが、すでに時間がきてしまいましたので、「JIS漢字コード」についてはごく簡単にお話することといたします。

コンピュータで漢字がほとんど使えるようになってきています。最先端のコンピュータではJISだけでも一〇五〇字が使えるようになっていきます。かつてはコンピュータで書けなかった鄧小平の「鄧」や森鷗外の「鷗」、スマップの草彅君の「弐」、飛驒高山の「驛」、それから内田百閒の「聞」なども、いまではコンピュータでたやすく書けるようになっていきます。ただしそれには一定の準備が必要で、電気屋さんから買ってきたままのパソコンでは書けませんけれども、ちよつと手を加えると書けるようになります。

ただ残念ながら、これらのこの漢字をメールで送ると、受け手ではそのままの表示にならないこともよくあります。

それはコードの体系が違うことからそうなるのですが、しかしその問題ももうあと数年のうちに解決されることは確実です。

最後になりましたが、「常用漢字」と「人名用漢字」と「JIS漢字」のこの三つの規格が私たちの日本語の将来の姿に大きな影響を与えています。そしてこれからの情報化社会の中で漢字を使っていくときに、その三つが非常に有機的に関連を取り合うという方向でないと、大きな混乱が発生するのは確実です。

この三種はこれまで役所の縦割り行政の中で、別々の省庁によって管理されてきました。それはいまでもその通りですが、しかしいまでは少しずつながらも相互に有機的な関連をもちはじめています。私はたまたまその三つに関する委員会に関係しておりますので状況がよくわかりますが、会議を見ていると、いろんなことがらに関連してずいぶん横のつながりができてきたものだと思えます。

これから注目していただきたいのは常用漢字で、これについては現在見直しの真っ最中です。あと三年ぐらいで新しい常用漢字が発表され、かなり多くの漢字がそこに追加されるだろうと思います。

たとえば「鬱」という難しい漢字があります。これを手で書くのはたいへんですが、携帯電話やコンピュータを使うと簡単に書けます。手で正確に書くのはたいへんだけれども、文字の意味を正しく把握して、正しくその漢字を使えば、日本語の表記にたいへん効果的であるという漢字が他にもたくさんあります。いまの審議では、必ずしも書けなくても正確に読めたらいいというレベルの文字を常用漢字にもっと追加したらどうかという動きがございます。

ただしいつでもコンピュータが近くにあるというわけではないですから、ペンや鉛筆を使って手書きで書けなければならぬ文字ももちろんあります。小学校で習う漢字などはそうで、合計一〇〇六文字ある「教育用漢字」は手で書けることが必ず要求されるでしょうが、それとともに「鬱」とか、穿鑿の「鑿」とか、非常に難しい漢字でありな

がら、意味が正確に把握できて正しく使うことができたなら、文章の中に使ってもいいのではないのでしょうか。他にも剝奪の「剝」とか捏造の「捏」とか「冤罪」の「冤」など、いまは常用漢字には入っていませんが、そういう漢字はルビをつけてもいいから、新聞や日常の文章には使うべきではないかという議論が現在主流を占めています。

これがどう展開するか、まだまだ審議の時間を必要といたしますが、見こみとしては、漢字がさらに多く使われる方向にあるということだけは確かでございます。

まとまりのない話になってしまいましたが、何らかのご参考になりましたら幸いです。ご静聴まことにありがとうございます。

〈キーワード〉常用漢字、人名用漢字、JIS漢字

〔編集委員会付記〕

同日、荒牧典俊本学教授（仏教学）による「佛像の出現をめぐって」と題する講演も行われた。尚、同講演録は事情により『大谷学報』第八十六卷第二号に掲載される予定である。